



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30
 例会場：卯辰山・松魚亭
 事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所
 TEL <0762> 22-2525
 会長：山岸与作 幹事：上田忠信
 情報委員長：中村三次

1982・10月7日 第225号

“本当にご存知ですか”

金沢工業大学教授 ^{すみの くら} 角倉 敏彦氏



① 販売単価が変わらない限り、「1個あたりコスト」が安いほど経済的に有利である。

② 販売単価が変わらない限り、不良率が下がるほど利益がふえる。
 上記設問は一般の経済雑誌によればいずれも正しいとされていますが、経済性工学によれば下記のとおりいずれも正しくないのです。

①の事例は下表のとおり製造コストが5円高くても販売数量を2倍にすれば利益が100円増加する。

	A	B
製造コスト	1個 80円	1個 85円
販売価格	1個 100円	1個 100円
製造販売量	10個	20個
利益	$(100-80) \times 10 = 200$ 円	$(100-85) \times 20 = 300$ 円

②の事例は下表のとおり不良率が5%増加しても生産量を増加することによって良品が増え、変動費の大小により得にも損にもなる。

	生産量	不良率	不良品	良品
現状	100個	10%	10個	90個
増産	120個	15%	18個	102個
差引	+20個	+5%	+8個	+12個

上表のとおり20個増産し不良率が5%増加しても良品が12個増産する。したがって売値が100円として増産に伴う経費が1個につき40円増加したとしても利益は $(100 \times 12) - (40 \times 20) = 400$ 円の増加となる。経費が1個につき60円増加すれば利益は零となり、更に経費が1個につき80円増加すれば400円の利益減となります。

このように経済性工学は経済的に有利な方策を探し、比較選択するための理論と技術の総合されたもので、現実の意思決定を助ける学問である。

現在の企業では意思決定のために科学的手法を上手に使っておらず、使っていても不十分であり、又損得に関する理論と技術が本来もっている力を発揮していない。

経済性工学は経営者が経営の色々な意思を決定するために最も重要な原理を探究する学問である。

ロータリー随想

柴田さんと新美術館

清水 忠

周知のように、来年の秋、石川県立新美術館が本多の森に誕生する。

県民馴染の現美術館ができたのは、20数年前、昭和34年のことであり、これはこれなりに芸術文化向上の役割を果たして来た。しかし、地方の時代、文化の時代といわれる風潮の中で、美術文化の活動は、より大きく、より多様になっていく。現美術館が、施設としてその風潮に対応することがむずかしくなってきたことも事実である。まして石川は、東京や京都にも劣らない美術工芸の土地柄でもある。伝統をふまえた文化創造の域としてまた潤いと安らぎの場として、新しい美術館を期待する県民のニーズが大きいのは当然のことである。

計画をみると、建物は、北海道や福岡と共に最も大きな規模のものとなるばかりでなく、水準の高い地元の美術工芸作品や、国宝23点を誇る前田育徳会の所蔵品の受託展示をふくめて、名実共にわが国有数の美術館となることが約束されている。

厳しい行財政改革のさ中にもかかわらず、むしろ厳しいさ中であればこそ、新しい美術館のオープンを県民は一日千秋の思いで待ち望んでいるとあってよいだろう。

このたび、わが金沢北ロータリークラブの柴田三郎さんが、この新美術館の設立を祝って、秘蔵品を3点寄贈された。内容は次の通りである。

一、紫檀硯箱

金沢市出身初代池田作美作。

同品のふたに“弘誓深如海”の銘および観音像の彫刻が施されており、水入れは金銀象嵌による米沢弘安作である。共箱には赤井直好撰文、細野燕台書にて制作由来が詳述されており、この作品は作者が、構想・制作に20余年の歳月をかけたとある。

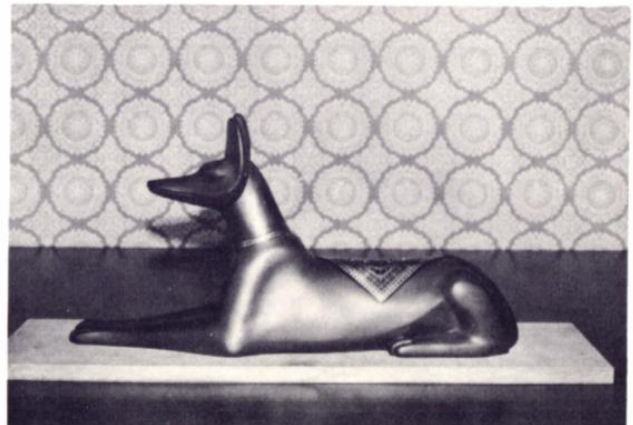
昭和26年完成、当時作者は61歳で制作活動最後の傑作と言われる。池田作美氏は、この道一徹の名工で、昭和34年4月11日69歳で逝去。



二、銀象嵌“神韻大香炉”

金沢市高橋介州作。

同品は、作者が昭和26年、47歳の時の大作で、同年審査員として日展に出品されたものであり、昭和33年には天覧を賜る。作者の代表作の一点と言われる。



三、日本画“牛”（タテ48cm×ヨコ64cm）

松任市出身安嶋雨晶作。

同品は西山翠嶂門下の逸材で、牛・馬の描写では当代随一を謳われた作者の代表作である。

この作品は昭和20年頃、作者38歳頃の大作である。安嶋雨晶氏は私の竹馬の友であり、人格者であったが、昭和48年8月10日66歳で逝去。



柴田さんの手許から美術館へ寄贈される日、招かれて私は、この3点の作品に接することができた。

その席には、人間国宝の大場松魚さん、作者のお一人の高橋介州さん、そして、作者のご子息池田作美さんが同席されて、どれ一つとらえても至宝といってよい香り高い芸術品とのしばしの別れを惜しんでおられた。

私は不明にして、これらの作品の価値を論ずることができない。しかし、馥郁とした芸術の芳香の漂う中で、強い感動に襲われた二つの思いだけは書き記さねばならない。

一つは、この三つの作品を柴田さんが需められた時期が、ひとしく期せずして昭和20年代の半ばであったということである。いうまでもなく、終戦直後の物心両面の混乱のさ中で、いくばくの人が芸術品を購うことに関心を示したであろうか。

いま一つは、そのようにして需められた作品を、いま手放される柴田さんの心情である。金銭的な価値は論外としても、柴田さんはこれらの作品に骨肉にもまさる深い愛惜の情を禁じざるを得なかったにちがいない。

にもかかわらず、そういった愛着や苦痛を超えて、柴田さんは、敢えて地域のために寄贈された。私は、そこに、超我的奉仕というロータリー精神の源点を見て頭の下る思いであった。

今週の花

吉山宥海
(9月16日)

じ ゆ ず 珠
そう たん もく け
宗 旦 木 槿
しゃくやくの照葉



